アメリカ合衆国世紀転換期における子供の遊び――社会改革団体によるレクリエーション・パーク建設をめぐって

畠　山　　望

はじめに

1909年5月29日、ペンシルバニア州ピッツバーグの労働者階級居住区に位置するアーセナル・パーク（Arsenal Park）では、何千人もの市民がタフト大統領の到着を今か今かと待ちわびていた。公園の敷地外にも人が溢れ返り、公園が面するペンシルバニア通りは、1マイル先まで人で埋め尽くされていた。大統領専用車が公園の敷地に入る数百ヤード前から、聴衆は大きな喝采の声をあげ始め、バンドの音楽に合わせ各々がハンカチや帽子、星条旗を振りながら大統領を歓迎した。この約2年前の1907年7月に開園したアーセナル・パークの敷地は、もともと連邦政府の所有地であり、1812年戦争時には武器庫として使用されていた。長きにわたり利用されていなかった敷地に目を付け、レクリエーション・パークを設立する計画を構想した、アレゲニー郡シビック・クラブ（Civic Club of Allegheny County、以下略称CCAC）の要請を受けたペンシルバニア州共和党下院議員ジェームス・フランシス・バーク（James Francis Burke）は、1904年に陸軍長官（Secretary of War）に就任したタフトから、公園建設の目的で、この敷地の貸借契約を取り付けた[1]。大統領となったタフトは噴水の除幕式に参加するために、アーセナル・パークに招聘されたのであった[2]。

タフトは除幕式のスピーチの中で、次のように述べた。「何よりも喜ばしいことは、目の前の丘を眺めると、子供たちがブランコに乗っているのが見えることだ。この偉大な工業の街は、市民に感謝をしなければならない。彼らが資金を調達してくれたお陰で貧しい子供が裕福な子供と同等の機会を得ることができた。どんな子供の成長する権利も私たちは否定してはならない」[3]。タフトが公園から退去する際に、ブランコに乗った子供たちはその場からタフトに声を送った。それに対しタフトも手を振り返し、会釈で応えたが、子供たちはブランコから離れることはなかったという。聴衆の一人は「大統領を見るよりもブランコで遊んでいた方がよっぽど楽しかったようだ」と話した[4]。

タフトがスピーチで言及したように、アーセナル・パーク建設をめぐる議論の中で、建設推進派の市議会議員やCCAC、ジョイント・コミッティ・オブ・ウィメンズ・クラブズ（Joint Committee of Women's Clubs、以下略称JCWC）に所属する社会改革主義者（social reformers）が強調したのは、公園の建設によって、貧しい子供が裕福な子供と「同等の（遊びの）機会」（the same advantages/privileges）が与えられること、であった。

アーセナル・パークが建設される18年前の1889年にアッパークラスの居住区の広大な敷地

にシェンリー・パーク（Schenley Park）が建設された。当初、ピッツバーグ市は労働者階級の子供もシェンリー・パークを利用するように促そうとしたが、実際には労働者階級の子供がこの公園に訪れることは極めて稀であった。そこで、市議会議員、CCAC、JCWC は労働者階級の子供が同等の遊びの機会を得ることができるように、労働者階級の居住区にアーセナル・パークを建設することを起案したのだった。

しかし、アーセナル・パークの遊具、設備、構造を詳細に見ると、アッパークラスやミドルクラスの子供が利用していたシェンリー・パークのような都市公園と「同等」なものではなかったことが明らかになってくる。シェンリー・パークはアッパークラスやミドルクラスの子供に自由で創作的な余暇時間を与える目的で建設されたのに対し、アーセナル・パークは労働者階級の子供を「適正に」教育することを目的としたプレイグラウンドを踏襲した作りになっていたのであった。

本稿の目的は、ピッツバーグのシェンリー・パーク（都市公園）とアーセナル・パーク（レクリエーション・パーク）の特徴と構造を比較、分析することによって、社会改革主義者と呼ばれる人たちがどのような理念に基づいてアーセナル・パークを建設したのかを検証することである。社会改革主義者が牽引した、プレイグラウンド運動やレクリエーション運動に対しては、1980年代以降の歴史家から批判的な眼差しが向けられ続けてきた[5]。改革者の関心は、子供の遊びそのものではなく、移民の子供たちをストリート、ビリヤード場、ダンスホール、ニッケルオデオンなどの堕落の場所から遠ざけ、社会的に制御することにあった。子供を自由に遊ばせたのではなく、監督役の大人の監視の下、「管理された遊び」（organized play）をさせたのであった。そのような意味において、プレイグラウンドやレクリエーション・パークは非民主的な試みであったと解釈されてきた[6]。しかし、本稿で取り上げるピッツバーグのアーセナル・パーク建設をめぐる議論の中で、社会改革主義者は、労働者階級の子供たちがアッパークラスやミドルクラスの子供たちと「同等の（遊びの）機会」を与えられるべきだと繰り返し主張した。この一見、民主的に見える主張に基づいて建設されたアーセナル・パークは民主的な場所であったのであろうか。

第 1 節では、アーセナル・パーク建設を推進したピッツバーグの社会改革団体を紹介する。第 2 節では、アメリカ合衆国で展開した都市美運動により次々と作られた都市公園の特性を概観し、ピッツバーグの都市公園であるシェンリー・パークの建設と特徴を検討する。第 3 節では、レクリエーション・パークのモデルとなったプレイグラウンドの教育的役割に焦点を当てる。第 4 節では、レクリエーション・パークとして設立されたアーセナル・パーク建設をめぐる議論と実際に建設されたアーセナル・パークの構造上の特徴を検証し、そこから見てとれる社会改革者たちの意図を探っていく。

ピッツバーグの社会改革団体

「より強い公共心と、より良い社会秩序の促進」（“a higher public spirit, and a better social order”）をミッションとし、CCAC は、活動初期において、子供のための遊び場であるプレイグラウンド、夏季に自然学習や技術教育を提供したバケーション・スクール、結核予防のためのオープン・エア・スクール（Open Air School）、公衆浴場、英語教育や愛国心教育を提供したソーシャ

ル・センターの設立など、数多くの課題に着手した。同団体は名家出身のアッパークラスの会員から構成されており、男女混合の団体だったものの、実際の活動は女性会員が担っていた点が特徴として挙げられる。

CCAC から派生した JCWC はピッツバーグにおいてプレイグラウンドの設立と運営を担うようになる。JCWC は活動開始からの数年間は献金を収入資源としてプレイグラウンドの設立と運営を行っていたが、1901 年以降はピッツバーグ市の中央教育委員会（Central Board of Education）や公共事業部（Department of Public Works）から厚い信頼を得て、市の予算が JCWC の活動に割り当てられるようになった。また、ピッツバーグにレクリエーション・パークが設立されるようになって以来、JCWC はアーセナル・パークの建設の際も、中心的な役割を担い、公共事業部や公園局（Bureau of Parks）と緊密な連携を結び、公園の設計と建設の責任を負った。

JCWC の指導的会員であったビューラ・ケナード（Beulah Kennard）やサミュエル・アモン夫人（Mrs. Samuel A. Ammon）は、全国規模の団体であった、アメリカ合衆国プレイグラウンド協会（the Playground Association of America、以下略称 PAA）の理事も務め、ピッツバーグの社会改革団体は、アメリカ合衆国全体のプレイグラウンド運動においても、先駆者的な役割を担っていた。1905 年、JCWC はその公共性を認められ、ピッツバーグ・プレイグラウンド協会（The Pittsburgh Playground Association、以下略称 PPA）として独立行政法人となり、さらに強い権限を持つようになった。

都市美運動とシェンリー・パーク

ピッツバーグのアッパークラスは、市の中心に位置するシェンリー･パークからほど近い、シェイディーサイド（Shadyside）、スクワレル・ヒル（Squirrel Hill）、ポイント・ブリーズ（Point Breeze）を含む、イースト・エンド地区（East End）に居住していた[7]。シェンリー・パーク建設の立役者となった公共事業部部門長（Director of Public Works）のエドワード・ビゲロー（Edward Bigelow）は自らが訪れたアメリカやヨーロッパの都市をモデルにピッツバーグで大規模な都市計画を遂行しており、1889 年に開園した 456 エーカーに及ぶシェンリー・パークの建設はその中心事業であった[8]。

19 世紀後半から 20 世紀初頭にアメリカ合衆国の都市計画に多大なる影響を与えた都市美運動はその地域の需要に合致するように都市を包括的に設計し、整備する運動であった。公共建造物や道路、交通機関、公園などが都市計画の対象となり、街全体に美しさ、秩序、調和をもたらすようにニューヨーク、シカゴ、カンザスシティなどの都市で大規模な整備が推し進められた。都市美運動の中核となったのは環境主義であった。環境主義は自然や芸術の美しさの力は人間の思考や行動を形づけることができるとし、景観や公園を整備することにより、人々の社会的統制ができるという考えであった。都市美運動の先駆者であるジョン・ラスキン（John Ruskin）、アンドリュー・ジャクソン・ダウニング（Andrew Jackson Downing）、フレドリック・ロー・オルムステッド（Frederick Law Olmsted）をはじめとする 19 世紀の英国や米国の作家や景観設計士（landscape architects）は、作品を通して、都会における緑地の社会的、美的価値を広

く伝えた。彼らによれば、公園は都市が疫病や病気と闘うための「肺」として機能し、さらには都市の混沌と無秩序と闘う民主的な装置であった。ビゲローはオルムステッドの影響を強く受け、「都市公園は、人々の向上を最も重要な目的としている。公園は労働者にリラクゼーションとレクリエーションの機会を与え、道徳的、肉体的な恩恵を与える」と語った[9]。

ビゲローの構想は、景観設計士のウィリアム・フォルコナー（William Falconer）の指揮下で、草木生い茂る丘陵や峡谷、渓流に富んだシェンリー・パークとして表現された。ビゲローとフォルコナーは、敷地内の荒れた部分には何千もの木や低木を植え、土地の輪郭を変化させて、人間の手を入れて穏やかな印象をもたらすものの、人間の手が入っていることは極力隠す努力をした。広大な敷地の中にはピクニックエリアと小屋を設け、家族、教会や友愛会（fraternity societies）の仲間が集える機会を提供した。また、園内の湖は、冬にはスケート、夏にはボートに乗れる場所として使われた。このような施設は、家族連れを大いに引き付けた。ビゲローは家族こそが安定し、秩序のある社会を作る基本的要素であると考えたため、家族での来園をもっとも期待していたのだった[10]。

1892年にサウス・サイド地区のホームステッド鉄鋼場で起こった大規模なストライキ（Homestead Lockout）をはじめとする労働闘争の影響で、ピッツバーグでは階級間に対立が生じていた。高まる緊張を緩和するためにも、ビゲローはアッパークラスやミドルクラスのみならず、労働者階級の市民もシェンリー・パークを利用するように促そうとした[11]。そのため、労働者階級の人々も公園に行きやすくするために、橋の通行料の無料化、大通りの建設、低運賃の公共交通機関の設置を当初の計画に盛り込んだが、実際には実行されなかった[12]。世紀転換期のピッツバーグに定住したポーランド系移民は主にローレンスヴィル（Lawrenceville）、ポーリッシュ・ヒル（Polish Hill）、イタリア系移民はブルームフィールド（Bloomfield）やイースト・リバティ（East Liberty）と呼ばれる、いずれも北地区に居住した[13]。シェンリー・パークは彼ら労働者階級の居住区から2.5マイルほど離れており、公園近くに路面電車が走っていなかったため、実質上、馬車や車でしか行くことができなかったのであった。また、公園内に入っても、緑豊かな植栽に飾られたドライブウェイが長距離続き、立ち入ることができる芝生まで1マイル程歩かなければならない構造になっていたため、徒歩での移動は困難であった。

さらに、シェンリー・パークの施設は明らかにアッパークラスやミドルクラスを対象にしたものであった。テニスコート、ゴルフコース、ポロ場、乗馬場などが建設されたが、これらの施設で行うスポーツは労働者階級にとっては馴染みのないものばかりであった。当時のアッパークラスやミドルクラスの間には「身体的活力への熱狂」（the cult of strenuosity）が拡大しており、急速な都市化や工業化を背景に、男性の精神面と肉体面の虚弱化が危惧され、積極的に体を鍛えることが推奨された。余暇に体を動かして遊ぶことで、個人は体力をつけるだけではなく、精神面を強化し仕事に対する活力を養うことができると考えられていた。「身体的活力への熱狂」を背景に、ピッツバーグでも、郊外のイースト・エンド地区ではテニス、ゴルフ、アーチェリー、クリケット、乗馬、射撃などが人気を集めるようになった。このような高尚なスポーツをすることにより、人々は活力を獲得すると同時に、社会的地位や優雅さを表現することができたのであった[14]。

シェンリー・パークへの交通は不便があり、公園内の施設も労働者階級を対象にしていなかっ

たため、当然のことながら、労働者階級の来園者は極めて少なかった。そこで、CCAC と PPA は、貧しい子供も遊びの機会が得られるように、労働者階級の居住区にレクリエーション・パークを建設することを起案した。次節では、レクリエーション・パークの原型であったプレイグラウンドの理念とプレイグラウンド運動の全米における展開を概観したのち、ピッツバーグのレクリエーション・パークの建設をめぐる議論に焦点を絞って追っていく。

全米プレイグラウンド運動とピッツバーグのレクリエーション・パーク

1886 年の夏、ボストンのチャールズ川の畔に子供が遊ぶための広場が作られ、労働者階級の居住区にもいくつかの砂場が作られたのを皮切りに、ニューヨーク、シカゴ、フィラデルフィア、ピッツバーグなどの北東部の都市でプレイグラウンド運動が広がっていった[15]。プレイグラウンド運動は、セツルメントハウス運動、児童労働規制運動、公立学校や保育園の推進運動などの社会改革運動と連動して発展していった。当時のジャーナリスト、教育者、医療従事者、社会改革者は、都市部で子供が遊び場として使用していたストリートの危険性と不衛生さを危惧し、ストリートに代わる遊び場としてセツルメントハウスの隣接地や移民の人口密集地の小さな土地を利用してプレイグラウンドを建設した[16]。

それぞれの都市でプレイグラウンドが設立されていくが、この運動が本格的に興隆していくのは、「プレイグラウンドの父」と呼ばれたジョセフ・リー（Joseph Lee）の登場を待つことになる。「遊びの時間は子供の生活の中で、最も濃密な時間であるべきであり、遊びの時間にこそ、子供は永続的な知識を学ぶのである」と主張したリーをはじめとするプレイグラウンドの提唱者は、プレイグラウンドでの遊びを「レクリエーション」として捉えるのではなく、「教育」と捉えた[17]。ドミニック・カヴァージョは著書の中で、プレイグラウンド教育の目的は、子供を「政治的に社会化」（political socialization）することであったと述べている。つまり、プレイグラウンドの提唱者は、プレイグラウンドは都市部の子供たちが「指導され、統制されるべき場所」として捉え、遊びを通して正しい方向付けをすることを目的としていた[18]。このため、プレイグラウンドの遊びは「管理された遊び」（organized play）と呼ばれた。リーと同様にプレイグラウンド運動の中心的存在であったルーサー・グリック（Luther Gulick）は、プレイグラウンドは複雑な相互依存によって形成された現代社会で生きて行くために不可欠な共同体意識を、都会の子供が養うための社会統制装置として考えた[19]。スポーツやゲームを通して、子供は個人の競争よりも所属するグループ内の調和を重視するように教育されたのであった。ただし、「管理された遊び」は個人の成長を否定するものではなく、所属するグループの勝利のために個人をいかに成長させることができるのかを子供たちに考えさせるものであった[20]。

プレイグラウンド増加の背景には、前節の都市公園建設でも背景となっていた環境主義が存在した。環境主義の思想の下では、悪や堕落の種は子供の奥深くには根付いていないため、彼らの愚行は適切な環境下で早期に矯正できると考えられた。これは当時、教育心理学界で流行していた「反復発生説」（the recapitulation theory）によっても裏打ちされていた[21]。「反復発生説」は心理学者スタンレー・ホール（Stanly Hall）によって打ち出された教育理論で、子供は成長の中で人間の社会的進化の初期段階を再体現する、というものである。すべての子供は成長段階で、

野蛮な時期があり、野蛮なことに興味を示す。狩猟すること、喧嘩すること、困難に敢えて立ち向かうこと、争いに参加し、それを乗り越えることなどは人間の本能から生じる行動であり、子供の成長段階で顕著に表れると考えられた。従って、子供がストリートで非行グループに参加し、問題行動を起こすことは自然なことであると認識された。しかし、このような本能は、遊びによって適切に社会化される必要があり、子供はプレイグラウンドという適切な環境の中で遊び、そして次に複雑なゲームを経験し、さらにはチームスポーツに参加することにより、社会道徳を学ぶことができると考えられた[22]。つまり、適切な環境を与えれば、比較的簡単に社会改革主義者が掲げる社会的規範を子供に身に着けさせることができる、というのが環境主義の見解であった。

それでは、「適切な環境」とされたプレイグラウンドにはどのような特徴があったのだろうか。典型的なプレイグラウンドは、三方が、くすんだ茶色の素材、刑務所のような石、もしくは木製でできた塀で囲まれ、残りの一方は騒がしい道に面していた。幼少期の子供を対象にしたプレイグラウンドには、砂場、子供用プール、滑り台、シーソー、ブランコ、雲梯、バランス梯子、跳馬などの遊具が備わっており、運営者の方針により、男女に分けられて遊ぶ場合も、男女混合で遊ぶ場合もあった[23]。大規模なプレイグラウンドには、フットボール、バスケットボール、野球などのチームスポーツができるアスレチック・フィールドもあり、運動の後に汗や埃を流すためのシャワーも設置されることも多かった[24]。また、フィールド・ハウスと呼ばれた建物がある場所もあり、その中にはトイレ、シャワー室、更衣室、教室、屋内プール、体育館が備わっていた。さらには、大きな日よけの下にテーブル、ベンチ、赤ちゃん用のハンモック、ブロックなどの玩具が設置されているプレイグラウンドもあった。また、多くのプレイグラウンドには公立図書館から図書館員が派遣され、図書館員による本の読み聞かせや貸出もあった。

1906年には全国レベルの団体であるPAAが創立された。ジェーン・アダムス（Jane Addams）、ジョセフ・リー、テナメントハウスの改革者であったジェイコブ・リース（Jacob Riis）、YMCAの運営者であったルーサー・グリックが創立メンバーとして役員に就任し、セオドア・ルーズベルトが名誉会長となった。PAAが発行した月刊雑誌 *The Playground* には、プレイグラウンドの教育理念、遊具を含む設備、プログラムやイベントの組み方、各都市のプレイグラウンドの紹介などに関する幅広い記事が掲載され、全国でプレイグラウンドの建設、運営を行っていた団体にとって貴重な情報源となった。PAAが牽引したプレイグラウンド運動は1917年には500以上の都市に広がった[25]。

ピッツバーグでは、CCACによって1896年に初のプレイグラウンドが公立学校のフォーブス・スクール（Forbes School）の校庭に作られた。その後、CCACから派生したJCWCにより、1900年までにピッツバーグ市には9カ所に、後にピッツバーグ市と併合されるアレゲニー市には3つのプレイグラウンドが作られた。いずれのプレイグラウンドも通年運営されていたのではなく、夏季休暇中の7月と8月のみ運営された点が特徴として挙げられる[26]。設立当初の来園者は少数だったものの、子供たちの間でプレイグラウンドは瞬く間に人気を博し、連日100人以上の子供が押し掛けるようになった[27]。初期のピッツバーグのプレイグラウンドは主に幼児を対象としていた。幼児たちは女性の幼稚園教員の指導の下、約2時間、砂遊び、水遊び、カートやおもちゃの馬をロープで引っ張る遊びをした後、屋内の幼児向けの教室で歌やゲーム、読み聞かせを楽しんだ。各プレイグラウンドには砂がいっぱいに入れられた箱と砂遊び用のバケツと

木製のシャベル、ブランコが置かれた。8歳から10歳くらいの少女たちは、「シスター・マザー」と呼ばれ、自分達よりも年少の弟や妹をプレイグラウンドまで連れて行きベンチに座って彼らの遊びを見守ったり、時には参加することもあったが、同年齢の少年に関しては場所が限られていることや、幼児に悪影響を及ぼす可能性があるという理由で入場が制限されていた[28]。

ピッツバーグでは一般的なプレイグラウンドをモデルとして踏襲していたが、すべてのプレイグラウンドが公立学校の校庭を利用して運営されていたため、運営は夏季休暇限定であり、遊具や設備を充実させることにも限界があった。また、面積も小さかったため、前述のように、利用者も幼児が中心であった。そこで、JCWCは「プレイグラウンド」という名前ではなく、「レクリエーション・パーク」(recreation parks)という名前で近隣公園を建設し、プレイグラウンドでは包摂できない少年少女の受け皿を作ることにした。

まず、JCWCは1902年にサウス・サイド高校(South Side High School)に隣接する土地にサウスサイド・パーク(South Side Park)を建設した。この公園はプレイグラウンドよりも広い敷地に作られたため、来園者数も多かった。野外の体操場には35×50フィートのシェルターハウスが作られ、その中にはポール、輪、体操用のインディアンクラブ、ホームベースやバット等の球技道具などが置かれた[29]。次にJCWCは、1904年に殆ど利用されていなかった、険しく、隆起にとんだ7エーカーの土地を整備し、ワシントン・パーク(Washington Park)として開園した[30]。レクリエーション・パークに対する需要は次第に市議会議員の間でも認められ、彼らは自分の選挙区にレクリエーション・パークを建設することの価値を見出すようになっていった。1908年には、ローレンス・パーク(Lawrence Park)、オームズビー・パーク(Ormsby Park)、デニー・パーク(Denny Park)などが次々に建設されていくことになる[31]。次節では、裕福な子供と「同等の(遊びの)機会」を設けるために起案されたアーセナル・パークの建設をめぐる議論と構造の特徴を検証し、そこに見え隠れする社会改革者の意図を探っていく。

アーセナル・パークの建設をめぐる議論と構造の特徴

1901年頃からJCWCは、後にアーセナル・パークとなるローレンスヴィルのアメリカ政府所有地を、住人のための公園として開放することを市議会に訴えていた。労働者階級の子供がシェンリー・パークに行くことは実質不可能だという批判が高まるにつれて、ローレンスヴィルにレクリエーション・パークの建設を求める声はますます強くなっていった。アーセナル・パークの敷地を獲得することに関して、CCACの中心的人物の一人であったルーシー・ドーシー・イアムズ(Lucy Dorsey Iams)は次のように述べている。「彼ら(労働者階級の子供たち)が皆、手に入れるべき権利を持っているか?いや、持っていない。権利を一番必要としている人たちに提供されるべき公園施設の充実度において、我々は他の市にかなり遅れをとっている」。また、イアムズはシェンリー・パークの恩恵が一定の市民のみに与えられていることにも不満を表し、シェンリー・パークを計画したビゲローに対して、できる限り多くの人々に恩恵が行き渡るよう、「公園建設に関しては、特定の人々のみに恩恵が与えられるべきではない。スケート場、テニスコート、野球場は可能な限り多種多様な人々が利用することができなければならず、特定の人々が不利を被ってはならない」と公園の増設を要望している[32]。 1906年1月にイアムズの発言が新聞

で取り上げられたこの時期は、翌月2月に行われる市長選への関心が最高潮に達していた。新聞は立候補者の公園建設に関する方針に注目し、市長選の大きな争点とした。ピッツバーグのマシーン政治の中心人物であった現職市長のクリストファー・マギーもシェンリー・パークが立地の関係上、交通手段がある近隣住民しか行くことができない場所だと認め、労働者階級の人々も訪問することができる公園の必要性を以下のように説いた。

> レクリエーション・グラウンド、ゴルフ場、テニスコート、野球場などの施設が建設される必要がある。若者に芝生の上を走り回って、有意義な時間を過ごしてもらおう。この街の中心部には400エーカー超の美しい土地があって、ソーホ、ヒル地区、ヘーゼルウッド、ブルームフィールド、ペンシルバニア通りやサウスサイド地区の住人すらアクセス可能なはずなのに、現状ではシェンリー・パークは自動車や馬車を所有する者か、よほど決心して長い距離をとぼとぼと歩こうとする者以外は利用不可能な状況である。ピッツバーグはイースト・エンドの居住者だけでなく、全ての住民に大いに恩恵が与えられるようなプレイグラウンドを作ることに大きな価値を置いている[33]

以上のように、アーセナル・パークの建設計画が議論された際、シェンリー・パークへの交通不便が建設理由の一つとして語られ、シェンリー・パークにあったゴルフ場、テニスコート、スケート場など、同じ施設がアーセナル・パークにも設けられることが訴えられた。つまり、アーセナル・パークはシェンリー・パークの代わりとなる公園として、労働者階級の居住区に求められたのであった。

CCACからの要請を受けたバークは陸軍長官であったタフトと交渉し、軍用地を公園建設の目的のため1年5ドルで貸借の契約を結んだ。敷地からは石垣が取り除かれ、車道が舗装され、花壇や水飲み場も整備された[34]。そして、1907年7月4日に待望のアーセナル・パークが開園したのだった。

アーセナル・パークは北をバトラー通り、南をペンシルバニア通り、西を39通り、東を40通りに囲まれた11エーカーの公園であった。（図1）構内はいくつものセクションに分かれており、それらは直線、またはカーブの道で繋がれていた。この時期に既に労働者階級の居住区に存在していたサウスサイド・パークやワシントン・パークと大きく違う特徴の1つが、ドライブウェイの存在である。長いドライブウェイが公園を取り囲む四つの通りから続いており、公園に機能性だけではなく、美しさをもたらしていた。セクション間のスペースも広く設けられており、そのスペースは非常に多くの植栽によって覆われ、緑豊かな印象を与えた。さらには人口池も作られた[35]。公園のほぼ中央には、大きな面積を割いて子供農園（children's garden）が作られた。（セクション2）公園の運営側は、子供農園は、農作物の栽培を教えるための重要な「実験的な農地」（experimental agricultural station）であると説明した[36]。ピッツバーグ・プレイグラウンド協会の年報は、アーセナル・パークの施設の中で子供農園が最も魅力的なものとし、子供たちが普段、店先やワゴンで束になって売られている野菜を自分たちの手で植え育て、日々の成長を観察することは大変有意義である、と紹介している[37]。

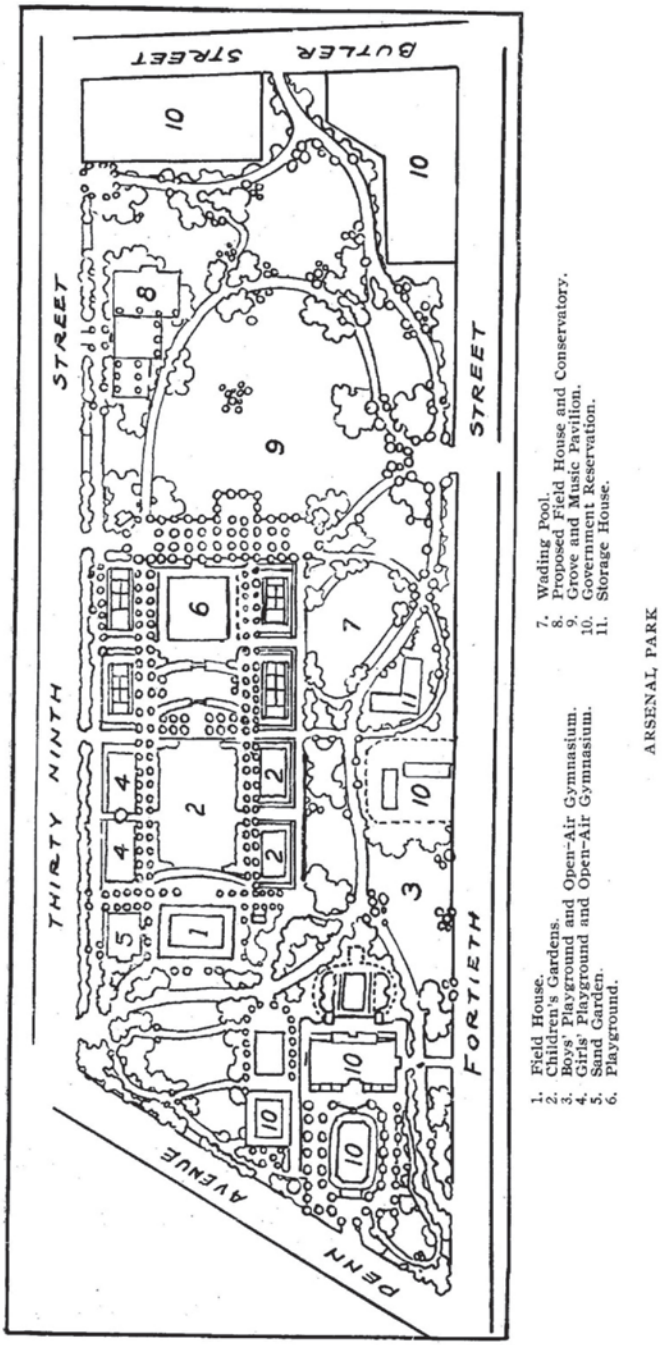

図1: "Arsenal Park"

Thirteenth Annual Report of the Pittsburgh Playgrounds, Vacation Schools and Recreation Parks under the Direction of the Pittsburgh Playground Association 1908.
SOURCE : Image courtesy of Historic Pittsburgh Text Collection, University of Pittsburgh Library.

農業ほど成長というものについて、つぶさに教えてくれるものはない。農家の男子は自分たちの手と頭を使い、何が成長にとって重要であるかを素早く判断するために（作物を）観察するように育てられている。子供農園はどんな種類の教育よりも、都会の子供を田舎の子供の生活に近づけてくれるものである。（中略）子供農園は子供に潜在する最も素晴らしい特性を引き出してくれる傾向があり、美しいものに対する愛情を育成してくれる。また、農業は子供の体全体を使わせ、結果は原因から生じることを示し、所有権や責任を教え、他人の生産物に対しても尊敬の念を払い、自分が手塩にかけて育てた生産物を失いたくないと願うことによって、他の人の生産物の価値をも知ることを可能にしてくれるのである[38]

子供農園は、19 世紀後半から教育者や専門家の間で興隆を見せた自然学習運動（nature study movement）の理念を反映したものであった。革新主義時代、人間が現代科学を受け入れることにより、人間の自律性が喪失し、社会生活が無機質になっていくことに対し脅威が生まれた。それに抗うように、人々の間には人生の喜びを感じるために人間の手が介入していない自然と直接的な繋がりを求める傾向がみられた[39]。研究者は直接自然と関わることでしか人間は自然の魅力や神秘性を理解することはできないと考えた。そのため、教科書よりも経験を通して獲得した知識の習得の方が優れているとされた[40]。456 エーカーの森のように広大なシェンリー・パークとは比較にならないものの、11 エーカーのアーセナル・パークでも自然と精神的な繋がりを持てる場所として「子供農園」が設けられたのであった。

アーセナル・パークは敷地が豊富な植物で埋め尽くされ、ゆったりとしたカーブを描くドライブウェイや小道がセクションを繋ぐ構造になっており、それまでに労働者階級の居住区に建設されていた無機質なプレイグラウンドやレクリエーション・パークとは違い、景観の美しさが重視されていたことは明らかだった。敷地面積を目いっぱいに有効活用するために、野球場などの大規模な施設を建設せず、人口密度が高く、古い住宅がひしめき合うこの地域とは対照的な余裕のある空間が広がっていた。また、公園の中心の大きな子供農園では自然との精神的な繋がりを体験する教育が農業体験という形で実施された。このような点から、PPA は、アーセナル・パークでアッパークラスやミドルクラスがシェンリー・パークで享受していた環境に近いものを提供しようとしたと推測できる。しかし、アーセナル・パークの他のセクションに目を向けると、プレイグラウンドやフィールド・ハウスが設置されており、シェンリー・パークの特徴とは大きく違っていたこともわかる。

公園の数か所（セクション 3, 4, 6）には他の施設を囲むようにプレイグラウンドが設置され、男女に分かれているものもあった。また、独立した砂場があった。（セクション 5）39 通り側にフィールド･ハウス（セクション 1）とフィールド･ハウスの建設予定地（セクション 8）があり、内部には更衣室、トイレ、体育館に加え、自然学習、工芸、演劇、歌、ダンス、ゲームや体操の授業ができる教室があった[41]。これらの授業は、プレイグラウンドと同様にピッツバーグに普及していたバケーション・スクールで提供されたものと同一であった[42]。バケーション・スクールは公立学校の校舎を利用して夏季に開催されたプログラムで、労働者階級の子供に生活上必要な技術を提供し、情操教育を施すものであった。例えば、工芸の授業では、13 歳から 16 歳の男子が大工道具を与えられ、木材や鉄を加工する技術が教えられた。同時代、社会改革者により、

工芸技術教育の必要性が唱えられて、アメリカ全土に工芸学校が設立され、公立学校でも工芸の授業が導入される動きがあった。つまり、アーセナル・パークのフィールド・ハウスで工芸の授業を提供することは、同時代の社会改革者が推進した労働者階級者への職業訓練を反映していた。

工芸の授業は、男子が問題行動を起こすことを防ぐ目的もあった。ピッツバーグのあるバケーション・スクールでは、問題行動を起こしていた黒人の男子を工芸の授業に参加させることによって、彼らの態度を改善することができたと報告している[43]。何よりも、工芸の授業には、労働者階級の子供たちに初歩的な工業技術を身につけ、将来、より高い階級に上昇することができるようにと願いが込められていた。ウィッカーシャム・スクール（Wickersham School）で開催されたバケーション・スクールの責任者は、以下のように述べている。

> ここで習った全ての技術は、今現在でも子供たちやその親にとって意味のあるものである。しかし、この技術習得がより良い結果をもたらすのは、もう少し後になってからであろう。なぜなら、子供たちは技術そのものを教えられただけではなく、自分たちの可能性を発見することができたからである。この自信は、技術教育を受ける前に比べて、より上位の職業に就くことや、より上位の社会的階級に所属することに対する野心を育てるのである[44]

つまり、バケーション・スクールの運営者は、工芸技術が労働者階級の子供が社会的、経済的に上昇していくために有効な教育と捉えていたため、新設のアーセナル・パークでも、その教育の機会を提供しようとしたのだった。

「管理された遊び」を目的としたプレイグラウンドが他の施設を囲むように存在し、身体と情操教育を目的としたバケーション・スクールで提供されたものと同様の教育を提供するためのフィールド・ハウスも建設されたなど、労働者階級向けのこの公園は単純に自由で創作的な余暇を楽しむための施設ではなく、教育を施す施設であることが前提だったことがわかる。

おわりに

アーセナル・パークの建設をめぐる議論の中では、アーセナル・パークはシェンリー・パークの代わりとなるべき公園だとされ、アッパークラスやミドルクラスと「同等の（遊びの）機会」が労働者階級にも提供されるべきと主張された。実際に、アーセナル・パークは、それまでに建設されたレクリエーション・パークと比較すると、シェンリー・パークなどの都市公園の要素を含んだものになっていた。つまり、19 世紀末から始まったプレイグラウンド運動の牽引者たちの間では、活動開始後 10 年足らずで、公共施設を利用しながら、労働者階級の子供たちに対して、アッパークラスやミドルクラスの子供が享受していた遊びの環境と類似したものを提供しようとした動きがあったのだった。「子供農園」に関して言えば、アーセナル・パークの 11 エーカーという狭い敷地の中で、労働者階級の子供に自然との精神的な繋がりを持たせるための苦肉の策だったと言えるかもしれない。そこでは遊びに対する民主性が問われたのであった。

属する階級に関わらず、すべての子供に同様の遊びの機会が与えられるべきだと考えられ、その努力が表現されたことは特筆に値する。しかしながら、アーセナル・パークは基本的に「管理

された遊び」を提供する、教育目的とした施設であったことも事実であり、レクリエーション・パークは社会改革者の葛藤や理想がせめぎ合っていた舞台であったと言えよう。

本稿を通じてもう一点指摘できるのは、環境主義と階級の関係である。都市公園もレクリエーション・パークも環境主義の理念に基づいて建設された。環境主義は、「適切な環境に人間を置くことで、その思考や行動を形づけることができる」という思想である。都市公園の例であるシェンリー・パークと、レクリエーション・パークの例であるアーセナル・パークの分析を通して見えてきたことは、「環境主義」の表現方法が対象とする階級によって異なっていたということである。

注

1 "Child Has Right to Playgrounds," *Pittsburgh Leader*, May 29, 1909.

2 "Great Ovation at Arsenal Park," *Chronicle Telegraph*, May 29, 1909.

3 *The Pittsburgh Press,* May 30, 1909, AIS 70.2, Box 1, File 9, Archives Service Center, University of Pittsburgh.

4 "Great Ovation at Arsenal Park," *Chronicle Telegraph*, May 29, 1909.

5 Paul Boyer, *Urban Masses and Moral Order in America, 1820-1920*, (Boston: Harvard University Press, 1978); Peter C. Baldwin, *Domesticating the Street: The Reform of Public Space in Hartford, 1850-1930* (Columbus: Ohio State University Press, 1999) を参照。

6 Sarah Jo Peterson, "Voting for Play: The Democratic Potential of Progressive Era Playgrounds," *The Journal of the Gilded Age and Progressive Era* 3, no. 2 (Apr. 2004), 145-175.

7 世紀転換期のピッツバーグのアッパークラスは、鉄鋼と製鉄をはじめとする製造業経営者とその家族で構成されていた。彼らのほとんどはスコッツ＝アイリッシュで、ピッツバーグに代々住む名家をルーツとしていた。一方、ミドルクラスは弁護士、教師、エンジニア、商人、熟練工、事務職員やその家族によって構成されていた。

8 ビゲローはピッツバーグのボス政治の中心人物であったクリストファー・マギー（Christopher Magee）の従兄弟にあたり、15 年間に渡り公共事業部部門長として活動した。彼の提案した計画は莫大な費用がかかり、「浪費家」（"the Extravagant"）と異名をつけられたほどであった。ビゲローは不動産業で財を築いたジェームス・オハラ（James O'Hara）の相続人であったメアリー・シェンリー（Mary Schenley）からシェンリー・パーク建設の目的で彼女の所有地を購入した。

9 Barbara Judd, "Edward Bigelow: Creator of Pittsburgh's Arcadian Parks," *Western Pennsylvania Historical Magazine* 58 (Jan. 1975), 55.

10 Ibid., 57-61.

11 1877 年に隣接州のウェストバージニア州で起こった鉄道大ストライキ（Railroad Riot）も階級間の緊張の原因であった。

12 John Bauman and Edward Muller, *Before Renaissance: Planning in Pittsburgh, 1889-1943* (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 2006), 26.

13 ピッツバーグの労働者階級については John E. Bodnar, Roger Simon, and Michael P Weber, *Lives of Their Own: Blacks, Italians, and Poles in Pittsburgh, 1900-1960* (Urbana: University of Illinois, 1982); Francis G. Couvares, *The Remaking of Pittsburgh: Class and Culture in an Industrializing City, 1877-1919* (Albany: SUNY Press, 1984); Ileen A. DeVault, *Sons and daughters of Labor: Class and Clerical Work in Turn-of-the-Century Pittsburgh* (Ithaca: Cornell University Press, 1990); Samuel P. Hays, ed.,

City at the Point: Essays on the Social History of Pittsburgh (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1989); S. J. Kleinberg, *The Shadow of the Mills: Working-Class Families in Pittsburgh, 1870-1907* (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1989) に詳しい。

[14] Francis G. Couvares, *The Remaking of Pittsburgh: Class and Culture in an Industrializing City, 1877-1919* (Albany: SUNY Press, 1984), 102-3.

[15] プレイグラウンド運動については、以下を参照。Dominick Cavallo, *Muscles and Morals: Organized Playgrounds and Urban Reform, 1880-1920* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1981); Joe L. Frost, *A History of Children's Play and Play Environments* (New York: Routledge, 2010); Stephen Hardy and Alan G. Ingham, "Games, Structures, and Agency: Historians on the American Play Movement," *Journal of Social History* 17, no. 2 (winter 1983), 285-301; Cary Goodman, *Choosing Sides: Playground and Street Life on the Lower East Side* (New York: Schocken Books, 1979); Ocean Howell, "Play Pays: Urban Land Politics and Playgrounds in the United States, 1900-1930," *Journal of Urban History* 34, no. 6 (September 2008), 961-994; Paul Boyer, *Urban Masses and Moral Order in America, 1820-1920*, (Boston: Harvard University Press, 1978).

[16] シカゴ初の公立のプレイグラウンドは、ジェーン・アダムスが運営していたハルハウスに建設された。

[17] Cavallo, 22.

[18] Ibid., 151.

[19] Boyer, 243.

[20] Cavallo, 8-9.

[21] Ibid., 56-60.

[22] Boyer, 245-250.

[23] 滑り台やシーソーはバランス感覚と責任感の育成に役立つ遊具と考えられていた。Cavallo, 26.

[24] プレイグラウンド近隣地域の家には浴槽はおろか、水道も備わっていないところが多かったため、激しいスポーツをするアスレチック・フィールドを提供するのであれば、シャワーを設置するべきだと考えられた。

[25] Boyer, 242-3.

[26] アレゲニー市は 1907 年にピッツバーグ市に併合された。

[27] *Report of the Civic Club Summer Playgrounds 1897*, Pennsylvania Room, Carnegie Library of Pittsburgh.

[28] *Report of the Pittsburgh Summer Play Grounds 1899*, Pennsylvania Room, Carnegie Library of Pittsburgh.

[29] *Seventh Annual Report of the Joint Committee of Women's Clubs of Pittsburgh, Allegheny and Vicinity*, 1903, 24-27.

[30] *Eighth Annual Report of the Joint Committee of Women's Clubs of Pittsburgh, Allegheny and Vicinity*, 1904, 15.

[31] *Thirteenth Annual Report of the Pittsburgh Playgrounds, Vacation Schools and Recreation Parks under the Direction of the Pittsburgh Playground Association 1908*, 22-24.

[32] "Want Arsenal for Public Park," January 3, 1906, AIS 70.2, Box 1, File 9, Archives Service Center, University of Pittsburgh.

[33] "Noncommittal on the Parks," *Pittsburgh Leader*, January 12, 1906.

[34] "Child Has Right to Playgrounds," *Pittsburgh Leader*, May 29, 1909.

[35] *Thirteenth Annual Report of the Pittsburgh Playgrounds, Vacation Schools and Recreation Parks under the Direction of the Pittsburgh Playground Association 1908*, 41.

[36] "Charge Neglect of Arsenal Park," June 21, 1907, AIS 70.2, Box 1, File 9, Archives Service Center, University of Pittsburgh.

[37] *Twelfth Annual Report of the Pittsburgh Playgrounds, Vacation Schools, and Recreation Parks under the Direction of the Pittsburgh Playground Association 1907*, 22.

[38] Ibid., 45.

[39] Kevin C. Armitage, *The Nature Study Movement: The Forgotten Popularizer of American's Conservation Ethic* (Lawrence: University Press of Kansas, 2009): 2-3; Liberty Hyde Bailey, *The Nature Study Idea: Being an Interpretation of the New School Movement to Put the Child in Sympathy with Nature* (New York: Doubleday, 1903): 31.

[40] Armitage, 1; Sally Gregory Kohlstedt, "Nature, Not Books: Scientists and the Origins of the Nature-Study Movement in the 1890s," *Isis* 96, no. 3 (September 2005), 329-30.

[41] *Thirteenth Annual Report of the Pittsburgh Playgrounds, Vacation Schools and Recreation Parks under the Direction of the Pittsburgh Playground Association 1908*, 41.

[42] バケーション・スクールは、現在、不足単位取得や不得意科目克服のための補修的な役割を担っている公立校のサマー・スクールの起源として考えられる。本稿で取り上げる時期のバケーション・スクールは職業訓練的な要素を多分に含んでいた。Kenneth M. Gold, *School's In: The History of Summer Education in American Public Schools* (New York: P. Lang, 2002) を参照。

[43] *Annual Report of the Pittsburgh Playground Association 1911*, 27.

[44] *Report of the Tenth Year of the Pittsburgh Play Grounds, Vacation Schools and Recreation Parks*, 1905, 47.